

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285176

研究課題名(和文) 互惠性に基づく教科準拠型多世代交流プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of subject-based multi-generation exchange program based on reciprocity

研究代表者

溝邊 和成 (MIZOBE, KAZUSHIGE)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：30379862

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、将来構想として掲げる「多世代交流学校」の基礎的研究としてとらえている。、国内外の学校園等で実施されているシニアスクールや聴講生制度、ボランティア活動等に焦点づけ、実践報告を行ってきた。それらの取り組みでは、高齢者自身が教養として学ぶ内容が用意されつつ、児童・生徒とのかわりがプログラムとして位置づけられていた。また教科内容に直接関係する内容のものだけでなく、様々な試みがなされていた。

研究成果の概要(英文)：This research sees as a fundamental research of "multigeneration exchange school" as a concept in the future. , Focusing on senior schools and auditing systems, volunteer activities, etc. that are being held at schools and other schools in Japan and abroad, and have made practical reports. In those efforts, while the elderly themselves prepared contents to be learned as liberal arts, the relationship with children and students was positioned as a program. Also, various attempts were made in addition to those directly related to subject content.

研究分野：教育

キーワード：世代間交流 プログラム 教科準拠 互惠性

1. 研究開始当初の背景

第2期教育振興計画(2013)をはじめ「超高齢社会における生涯学習」や「家庭教育支援の推進」等に関連する報告書が示すように「世代間交流の促進」がますます重要視され、実践もなされてきている。そうした動きは、我国の生涯学習と世代間交流：中教審第二次答申(1997)の「高齢社会に対応する教育の在り方」や「少子化と教育について」(2000)等が契機になっている。

実践に目を向ければ、例えば、愛知県扶桑町では、全国初となる小中学校での「聴講生制度」(2002)が誕生し、世代間交流も行われている。福岡県では、筑紫郡那珂川町や糟屋郡須恵町でもその例が見られる。また、福岡県古賀市高齢者生きがい支援センター(えんがわくらぶ)でも近隣の小学校との交流が行われている。岡山市では、2002年から文部科学省の指定研究を受けて以来、従来の学校内にシニアスクールが設置され、札幌市清田区や京都府精華町、鳥取県西伯郡伯耆町でもシニアスクールが導入され、その一部に世代間交流が見られる。最近においても、第2期教育振興計画等に掲げる「世代間交流の促進」は、これまでの取り組みとともに新たなイベントや活動等も行われつつある。しかし、それらの報告には、扱われる内容の吟味や当事者の学び、当事者間で共有された知識等に関する検討が十分なされていないのが現状である。

国内外の学校にかかわる世代間交流研究：学校にかかわる世代間交流の調査研究では、例えば、Kaplan(2001)が学校ベースの世代間交流活動のためのキーとなる要素を明らかにしているほか、スウェーデンの義務教育におけるプロジェクト報告等も見られる。最近では申請者らのアメリカ・ハワイ州での学校に関する報告や Intergenerational school (アメリカ：オハイオ州)の特徴をとらえ支援の在り方を論じる研究が示されている。しかし、日本で Intergenerational school としての特徴や活動プログラムの検討などは見当たらない。また具体的活動についても、教科的な内容に対する高齢者と子どもの学びやその過程の議論は十分に行われておらず、今後の課題として受け止められる。

学校における世代間交流の課題については様々考えられるが、角間・草野(2012)の「交流の対象を理解する学習を前提としてプログラムが作成されるべき」「支援される側の位置づけから活動の担い手として、さらに協働するメンバーとして参画するプログラムが推進されること」と指摘している点に今後の展望が見出される。

世代間交流の特徴としての「互恵性」と心理学成果の援用：世代間交流で重要視されて

いる「互恵性(reciprocity)」は、Newman(1997)が「サポートを与えると同時に与えてもいく中で互いに良い影響を及ぼし合う相互関係」と定義付け、世代間交流では、青少年と高齢者が互いに学び合い、助け合う双方向的な関係性を構築していく過程において両世代に互恵性(reciprocal)が生じるとの見解を示している。しかしながら、交流活動の類型等をベースにした「互恵性」の検討や、「互恵性」に基づく交流プログラムの開発には未着手であり、研究の余地を残しているにとらえている。

2. 研究の目的

本研究は、「互恵性に基づく教科準拠型多世代交流プログラム」の基礎的研究として、国内外の学校園等で実施されているシニアスクールや聴講生制度、ボランティア活動等の成果と課題をベースに実践検討することを目的とする。

3. 研究の方法

具体的な資料収集と分析においては、(1)国内で取り組まれている小・中学校における「聴講生制度」の視察および関係者への意識調査、(2)国内で取り組まれている小・中学校におけるシニアスクールの視察および関係者への意識調査、(3)国外で取り組まれている世代間交流型の学校視察、(4)国内で取り組まれている世代間交流事業の事例分析 を対象とした。

4. 研究成果

(1) 聴講生制度に関して

愛知県丹波郡扶桑町・・・本町の聴講生制度は、生涯学習の場として、小中学校で行われている授業、行事等の教育活動の場を広く町民に開き、町民と児童生徒の共生と協力、競争の中により質の高い教育の展開を期待して2002年より取り組まれている。聴講生の12年間の参加状況から中学校の内容の学び直しに関心が高いことがわかった。同教育委員会も、制度導入の長所として、地域の学校理解、地域の安全強化、授業の質の向上、聴講生：生徒のよき相談者、聴講生の生きがいの場・ふれあいの場の点を挙げている。また聴講生の感想(ホームページ記載)の分析からも学ぶ楽しさや喜び、生徒とのふれあい体験や教員の指導の丁寧さに感心・感動が見られる肯定的評価がなされていた。

福岡県糟屋郡須恵町・・・本町聴講生制度は、2005年より中学校で取り組まれている。「生涯学習・リカレント教育の場」の一つと位置付け、学社融合、校区コミュニティづくりに資する等とされた。

生徒への質問調査の結果、聴講生受け入れに関して肯定的であった。また聴講生のインタビュー調査からも学び直しができ

るよい機会であるにとらえるとともに、生徒には学習面のみならず心の成長や生き方への好影響をもたらすとしている。聴講生の受講科目担当教員は、「聴講生の参加により緊張感を感じるが、授業を乱されることはない」と考え、むしろ聴講生から学ぶことが多くあるにとらえていた。生徒、聴講生、教員間に互恵的関係がうかがわれる。生徒の個人情報の漏洩に関しては、学校側はあまり心配していないと受け止めており、聴講生への信頼度の高さが読み取れた。

課題として聴講生の人数が挙げられるが、同町が高齢者に実施した調査結果から、趣味内容も取り入れた聴講生のプログラム作成や聴講生との部分的交流も認めていくプログラムの工夫が考えられる。

高知県土佐郡土佐町・・・「地域全体で学校教育を支援するとともに、学校を拠点とした生涯学習を推進する」土佐町学校応援団では、学校応援団、放課後子ども教室とともに聴講生制度となる「生涯学習学校」が設置されていた。学校応援団の登録者が対象となるこの聴講生制度は、学校支援のボランティア活動や放課後子ども教室で支援したりする活動の傍で、登録者がこの制度を利用し、学び直すといった生涯学習の機会保障につながっている。この点は、他地域の聴講生制度とは異なり、聴講生制度が独立してあるのではなく、授業ボランティアや放課後子ども教室での支援など子どもとの多くの関わりを前提として設けられた制度と言える。

小・中学生約 140 名への質問紙調査から、以下の点が明らかになった。

子どもが高齢者を教える意識については、小学生では低かったが、中学生は逆に高かった。その要因として中学生にとって一緒に学ぶという形態から高齢者とフラットな関係が成立していたため高齢者の交流活動に対する想いを理解できたり、何をどのように教えてあげれば良いかが見えたりしたと受け止められる。また、高齢者に教えてもらいたい内容として歴史（一般、地域）や昔の遊びなどであった。それらは、同時に高齢者と一緒に学びたい内容としても見いだすことができた。高齢者に教えてあげたい内容では、現代の社会や遊びに続き、電子機器等が特徴的であった。これらから、各時代の文化を携えて参加できる用意があれば、双方向に有意義な学びが展開されると予想される。また知識・技能の高度化から趣味的なもので多様なニーズに対応する可能性があれば、聴講生制度の需要も高くなると考えられる。

(2) シニアスクールに関して

岡山市岡輝学区・・・シニアスクールは、聴講生制度とは異なり、小学校や中学校の教室等を利用して、独自のカリキュラムを展開し、受講者（以下シニア生）のニーズを参考にした専門的な講師に高齢者が学ぶスタイルである。「教育改革国民会議提案」

（2000）や「21 世紀教育新生プラン（レインボープラン）」（2001）において、コミュニティスクール（保護者や地域住民が運営に参画する新しいタイプの公立学校）の可能性や課題を調査する流れの中で、この学区のシニアスクールは生まれた。

ここでの定義は、「60 歳以上の高齢者が地域の小中学校の施設を利用して中学校程度の一般科目を再履修するところ」をシニアスクールとし、その目的を「地域の中で、世代の壁を越えた『心の交流』や『連携』を進めるために共感しあうことによって生まれる新しい人と人とのつながりを探る。また『おじいちゃん・おばあちゃんの知恵』の積極的な活用によって、実践的ユニークな問題解決の方法に取り組む。結果として、小中学校の教育活動及び幼稚園、保育園の保育を支援する人材が要請されることを期待する。」としている。

このシニアスクールは、3 つの教室（以下、中、小 A、小 B）で成り立ち、それぞれが特徴をもっている。岡輝中学校では、月、水、金（3 日/週）であり、清輝小学校は、火、金（2 日/週）、岡南小学校は、週に 1 日（金曜日）となっている。どの教室も 1 日 5 時間（1 時間目から 4 時間目までが午前中、午後からは 5 時間目）の時間割が組まれている。基本的には、入学してから 3 月末までの 1 年間で通学期間となり、最終日は修了証書授与式が執り行われる。ただし、終了した翌年であっても同校に申し込むことができる。受講科目は、国語、社会、数学、理科、英語、音楽、家庭科、美術、体育の 9 科目である。教科外に関しては、岡輝教室と清輝教室に見られるように、運動会・体育科や文化発表会、音楽・学習発表会などに参加していることがわかる。岡輝教室では、クラスごとに合同給食が行われたり、1 年生とのふれあい講座が実施されたりしている。清輝教室では、各学年に交流が進められており、生活科に関係する昔遊びやおもちゃ作り、家庭科の内容や総合的な学習の時間・社会科に関係するミシンの使用や戦争の話が扱われていた。特に 1 年生への関わり時間が多く持たれていた。岡南教室も学年ごとの交流が進められており、昔遊び・昔の道具（社会科や総合的な学習の時間）ボタンつけ（家庭科）などが扱われている。どの教室も幼稚園や保育園との交流が行われていた。

シニア生は、一年間シニアスクールに通い続け、修了したとしても、その多くは継続して受講する実態がある。そのため、次年度も全く同じ内容を繰り返していくのでは、受講生にとっても十分な刺激とならないと講師側もとらえ、内容編成にその工夫が見られる。また、質問紙調査の結果は、次のとおりである。「子どもとのかかわり（教える）」点については、教える「楽し

さ」は、どの教室の聴講生も肯定的であったが、「教えたい」項目では、その平均値からシニア教室小 A、小 B があまり肯定的でないといえる。「自信」では、その分析結果から、シニア教室(中)とシニア教室小 A、小 B に有意な差が見られた。シニア生(小 A、小 B)の方が否定的な受け止めだったと解釈できる。児童生徒の「理解」項目は、いずれも平均値が低く、教室問わず、否定的であったことがわかった。「ともに学ぶ工夫」は、本制度をより多く取り入れることや学校併設、近隣設置などとともにイベント・行事参加も支持が得られている。専用バス導入に関しては、それほど積極的とは言えないと受け止められる。「自宅の近くにもっとあればいいと思います。(69 歳女性)」「教科：社会情勢、現在の世界、日本など幅広く教えてほしい。(79 歳女性)」「放課後、子供たちと部活動をやりたい。(66 歳女性)」「調べて、教えることは大変難しい。(71 歳女性)」等の感想もあった。

北海道札幌市清田区(札幌市立三里塚小学校内設置)・・・本シニアスクールは、2006 年 8 月より制度化され、小学校の空き教室を利用した講座制の学校である。満 60 歳以上の清田区民を対象に、20 名を定員としている。5 月下旬～12 月下旬の毎週水曜日に 2 講座ずつ実施される(全 50 講座)。2 期制が導入され、授業時間帯は、午前中(8 時 30 分～12 時)となっている。活動内容は、スクールとして独自の講座が行われる一方で、全時間の半分程度に、小学生との世代間交流活動が設定されている。三里塚小学校の授業や学校行事などにも参加し、児童とのかかわりが用意されている。近隣の施設や工場等の見学など日帰りの研修旅行も実施されている。

受講生、児童、教師に質問紙調査を行った結果、次の点が明らかとなった。1 点目は、充実した交流活動である。シニアスクールの受講生は、その期間内で全学年の児童との交流活動に参加しており、特に高学年の交流活動では、児童が昔のくらしなどを知るために受講生へ行うインタビューとともに、ものづくりやゲームが取り組まれていた。また、歌や楽器演奏、プレゼントに加え、交流前の授業参観も設定し、数少ない機会で様々なタイプの活動が工夫されていた。2 点目は、交流活動の受け止めの違いが見られた点である。交流活動に対して、教師は互恵的關係が成立しているとしていたが、児童は、「一緒に遊ぶこと」が「楽しい」としながら、「放課後も遊ぶ」ことには消極的、「仲良くなる自信」もそれほど強くない。また受講生にとっては、交流活動で「教える」ことは、楽しかったりするが、「教える」ことに自信がなかったり、児童の手助けになっているかどうか不安であることがわかった。3 点目として、受講

生、児童ともに多くの科目、活動に対して「一緒に学ぶ」ことを期待している点が挙げられる。「科学実験」「料理」「ものづくり」「合奏」「昔遊び(外)」と一緒に学ぶ希望も見られ、具体的な活動の内容決定に関して示唆的結果といえる。4 点目は、互恵性(Reciprocity)を高める方策として様々な意見が得られた点である。それは、一方的な損得関係からの脱却であり、より対等な関係の構築といえる。そのアイデアとして「行事・イベントに参加できるようにする」点は、児童、受講生に共通して肯定的支持が認められた。しかし「学校と高齢者施設」の併設に対しては、双方ともそれほど高い支持が得られず、「一緒に学習することの制度的導入」についても児童、受講生に意識のズレが予想された。

(3) 国外の学校視察：オハイオ州クリーブランドにある The Intergenerational School (以下 TIS と称する。生徒数 TIS 244 名(約 250 名)、平均 17 名/クラス)・・・Peter Whitehouse(TIS 創設者)によれば、TIS は、地域コミュニティ・学習環境・相互作用といった観点から検討しつつ、Dissemination Granttisonline. (<http://www.org/approach/dissemination-grant/>)、Nationally-renowned educational model、J. Dewey School Curriculum 等を参考にしている。またオハイオ州のカリキュラムに準じ、その範囲を教師が教える中に、高齢者も参画するとしている。例えば、歴史に関しては、高齢者がライフヒストリーを話してリアリティを持たせているなどが挙げられる。教職員からのボトムアップも加え、他の施設との共同開発も検討している。その効果としては、オハイオ州のカリキュラムにない経験(高齢者理解)が生徒の中に芽生えてきている。基本的には、カリキュラムは、クラスの担任が決めるが、一人ひとりの個人のニーズを捉えてプログラム化している。学習への参加者は、保護者以外の参加もあり、多世代の参加も認めている。TIS 校長によれば、読み書きのサポートに高齢者はよく来校するが、高齢者が授業に参加して学ぶという交流はない。高齢者の参加は個人指導を含む open space を中心としたものになっている。大学生のボランティアに関しては、必ずしも教員になる学生が来るわけではないが、1 週間×2 回での参加で Community service component 経由での参加が多い。

Jadson Park(ナーシングホームと高齢者専用住宅の複合施設)における造形「ハロウィーンの制作」(訪問活動)では、高齢者は 8 名が参加し、生徒 6-8 grade(11~14

歳)は、約 50 名が加わっている。各テーブルに高齢者 1 名、配置。教員 2 名参加、ボランティア学生 1 名であった。具体的な活動内容は、ハロウィーン用の作品を 2 種類作る。なお、月 1 回で 3 つの学校がローテーションで活動。ホールでの活動もあったり、生徒の人数によっては居室近くの open space を使用したりする場合もある。Lake Shore Intergenerational School (2014 年開校)は、K から 2 grade までの児童で縦割りのクラス編成である。1 クラス 16 名で合計 7 クラス 106 名在籍。授業時間は、理科・造形・音楽は 45 分であるが、読み書き・社会は 75 分となっている。体育は毎日実施されており、音楽と造形は隔日で交互に実施。週 5 日制となっている。Near West Intergenerational School の訪問では、“Intergenerational Choir”(音楽療法士の指導による合唱練習)が観られた。具体的な活動は Semitone vocal exercises (Many mumbling mice)、1-5 voice range exercises (double bubble gam)、call and response、The Lion sleeping tonight であった。対象児童 13 名、参観している保護者は 3~4 名(高齢者 1 名を含む)であった。

(4) 国内での実践・調査等

熊本県益城郡 M 町にある老人社会福祉施設(以降、施設 M とする)の利用者(70 歳以上 10 名程度)とその近隣に位置する M 町立 K 小学校の第 1・2 学年児童(43 名)を対象に 3~5 場面に観察場面を焦点化し、その中でどのような教科的な内容を含む活動や互恵的な学びが見られたかについてエピソード事例を挙げて考察した。その際、MI(多重知能)理論(Gardner 1983)および互恵性の考え方(ex. Norman 1997)を援用し、分析にあたった。結果は、多様な知性ならびにエントリーポイントを活用していた。特に空間的、対人関係的、内省的知性を働かせ、エントリーポイント:経験的(具体的な体験、観察・実験を通す)、社会的(集団でやりとりしたり、役割を果たしたりする)を活用していた。

木を素材とした幼児と高齢者の世代間交流活動(造形活動)では、次のような点が明らかとなった。すなわち、5 歳児(30 名)、福祉施設利用者(10 名)による「額縁づくり」(70 分)において、木の素材に対する感覚の共有および共同制作に交流が促される結果となった。幼児から高齢者に対するかかわりは、主に感覚や制作活動を共有する様相として見られた。つまり、「つるつるになった」「イルカみたいな形になった」「いいにおいだね」などヒノキ(素材)の加工プロセスにおける触覚や視覚、臭覚をはたらかせている姿や言葉のやりとりがそれにあたる。他方、高齢者から幼児へのかかわりとしては、それらの感覚や活動の共有とともに、幼児の発言に対す

る承認や共感、あるいは「こうするんだ」といったお手本を示すなどの言葉がけも行われていた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 6 件)

- 1 溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真(2015)小中学校の聴講生制度に見られる世代間交流,日本世代間交流学会誌 Vol.5 No.1,47-55 査読有
- 2 溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真(2017)学校支援活動参加者を対象とした聴講生制度における世代間交流 -土佐町学校応援団「生涯学習学校」の分析と小・中学生の意識調査をもとに-,日本世代間交流学会誌 Vol.6 No.1,49-58 査読有
- 3 吉津晶子・溝邊和成(2017)世代間交流の教育的意義に関する研究の動向と課題,熊本学園大学付属海外事情研究所「海外事情研究」44,109-127 査読有
- 4 矢野真・田爪宏二・吉津晶子・溝邊和成(2017)保育者養成における世代間のコミュニケーション支援に着目した造形活動 -木育活動における事例的検討-,大学造形美術教育究,15,26-31 査読無
- 5 溝邊和成(投稿中)小・中学校の空き教室を活用したシニアスクールの世代間交流,日本世代間交流学会誌 Vol.7 No.1 査読有
- 6 溝邊和成(投稿中)小学校シニアスクールに見られる世代間交流に関する児童・高齢者・教師の意識,兵庫教育大学研究紀要 第 51 巻 査読無

[学会発表](計 17 件)

国際学会

- 1 Kazushige Mizobe (2015), The pilot programs; "auditor system" and "senior school" in elementary/junior high school, Japan, Generations United 18th Global International Conference
- 2 Kazushige Mizobe, Hirotsugu Tazume, Masako Yoshizu, Makoto Yano (2015), A Research for the Reciprocity of School-Based Intergenerational Programs in Japan, Generations United 18th Global International Conference
- 3 Hirotsugu Tazume (2015), Kindergarten Teachers' Practical Knowledge and Support for Early Childhood Numerical Cognition: A sustainable learning perspective, OMEP World 67th Assembly and Conference
- 4 Kazushige Mizobe, Hirotsugu Tazume, Masako Yoshizu, Makoto Yano

- (2016), Features for the Auditor System in Elementary and Junior High Schools in Fukuoka, Japan, Fukuoka Active Ageing Conference in Asia Pacific 2016 (Fukuoka)
- 5 Masako YOSHIZU, Kazushige MIZOBE, Hirotsugu TAZUME, Makoto YANO (2016), What do you want to communicate and teach? The roles of seniors and children as seen through intergenerational exchange activities, Fukuoka Active Ageing Conference in Asia Pacific 2016 (Fukuoka)
 - 6 Kazushige MIZOBE (2017), Intergenerational exchange activities in elementary school between 7-8 year old children and the elderly, European Early Childhood Education Research Association 29th Conference (accept)
 - 7 Masako YOSHIZU, Kazushige MIZOBE, Hirotsugu TAZUME, Makoto YANO (2017), Program Interconnection in Intergenerational Exchange: Through Creative Activities and Natural Experience, Generations United 19th Global International Conference (accept)
 - 8 Kazushige MIZOBE (2017), The program for the elderly: "Senior School" in junior high school, Japan, Generations United 19th Global International Conference (accept)
国内学会等
 - 1 溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真 (2014) 聴講生制度実施校の生徒からみた世代間交流, 日本世代間交流学会第5回全国大会, 2014.10
 - 2 溝邊和成・吉津晶子・矢野真・田爪宏二 (2014) 教科教育にかかわる互恵的な世代間交流の展望, 日本世代間交流学会第5回全国大会, 2014.10
 - 3 溝邊和成・田爪宏二・吉津晶子・矢野真 (2015) 聴講生制度導入に対する中学校生徒の意識, 日本世代間交流学会第6回全国大会, 2015.10
 - 4 溝邊和成・吉津晶子・矢野真・田爪宏二 (2015) 教科教育にかかわる互恵的な世代間交流に向けて ~学校園をベースにした co-learning, re-learning のデザイン, 日本世代間交流学会第6回全国大会, 2015.10
 - 5 溝邊和成・吉津晶子・田爪宏二・矢野真 (2016) 小学校と施設の世代間交流活動に見る互恵的な学び・育ちの展開, 日本保育学会, 2016.5
 - 6 溝邊和成・吉津晶子・田爪宏二・矢野真 (2016) 中学校聴講生制度の特徴と高齢者の参加意識 ~資料ならびにインタビュー調査をもとに~, 日本世代間交流学会第7回全国大会, 2016.10
 - 7 矢野真・田爪宏二・吉津晶子・溝邊和成 (2016) 保育者養成における自然活動との連続性を意識した造形活動, 第7回日本世代間交流学会全国大会, 2016.10
 - 8 溝邊和成・吉津晶子・矢野真・田爪宏二 (2016) 教育・保育現場に広がる世代間交流のあり方を考える ~フィールド・対象・コンテンツから見えてくる世代間交流活動の展望と課題~, 日本世代間交流学会第7回全国大会, 2016.10
 - 9 溝邊和成 (2017) シニアスクール(小中学校)の世代間交流における受講生意識, 日本世代間交流学会第8回全国大会(熊本学園大学, 2017.10 発表予定)
〔図書〕(計2件)
 - 1 溝邊和成・吉津晶子編著, 田爪宏二・矢野真 『世代間交流のヒント』学研コロン出版(2017年:印刷中)
 - 2 溝邊和成 「リ・ラーニングをひらく学校」草野篤子・溝邊和成・内田勇人・安永正史編著 『世代間交流の理論と実践シリーズ2 世界標準としての世代間交流のこれから』三学出版(2017年:印刷中)
〔その他〕
 - ・発表: 吉本洋(2015)可能性は無限大! 世代間交流の魅力とは? ~若返るお年寄りたち! 大人になる子供たち!~, 第6回アクティビティ・ケア実践フォーラム, 2016.3
 - ・報告書: 科研報告書「互恵性に基づく教科準拠型世代間交流プログラムの開発」資料編(研究代表者: 溝邊和成) 2017.3
- ## 6. 研究組織
- (1) 研究代表者
溝邊和成 (MIZOBE, Kazushige)
兵庫教育大学・大学院学校教育学研究科・教授
研究者番号: 30379862
 - (2) 研究分担者
吉津晶子 (YOSHIZU, Masako)
熊本学園大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号: 60340568
田爪宏二 (TAZUME, Hirotsugu)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20310865
矢野真 (YANO Makoto)
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号: 00369472
 - (3) 研究協力者
吉本洋 (YOSHIMOTO, Hiroshi)
社会法人恵寿会「老人総合福祉施設グリーンヒルみふね」・施設長